

あなたは終末期（死）をどこでむかえますか

広報げろ 2008.11

あなたは終末期(死)をどこでむかえますか

人は生きている限りいつかは死を迎えることとなります。70歳以上の人に行われたある調査では男性は60%の人が在宅で配偶者など家族に看取られて死にたいと考えているのに対して女性は周囲に迷惑はかけられないという意識も働いて在宅死を望む割合は40%となっています。現実には80%以上の人が病院で死を迎えています。これは家族構成などの家庭環境、在宅療養に必要な不可欠な医療環境、日本人の死亡原因の三分の一以上はがんであるという疾病構造によるものと考えられます。

◎終末期を支える医療の危機

いずれにしろ人が終末を迎えるとき医療の関与は必要で避けることが出来ないものとなっていますが、この、人の死を看取るはずの医療環境が危うくなっています。死に臨むとき、ほとんどの人は安楽に苦痛なく死にたいと望んでいます。病院の役目は、患者の救命ばかりでなく、安らかな死を迎えるための緩和医療にも大きな責任があります。安楽な死を看取るのも病院の役割のひとつと考えるからです。

◎在宅死の現状

在宅死を望む人のためにはかかりつけ医の存在は欠かせません。24時間、いつでも対応できる医療、看護、介護体制がない限り安楽な死を迎えることは困難で、さらには必要な場合にはかかりつけ医と病院の連携も必要です。かかりつけ医には在宅医療を支えるための専門的技術と、何よりそれに当てる時間が必要ですが、日本の現状では両方とも大変不十分です。病院医師は入院患者に対応するのが本来の仕事ですが、余裕があれば在宅に飛び出すことも出来ましょう。しかし現在はその余力がありません。

◎金山病院の対応

金山病院では訪問診療を行っている在宅療養者が終末を迎えられたとき、訪問看護師と連携し、勤務時間内で複数の医師がいるときに院長が往診し在宅死に備えています。これは死亡前の24時間以内に診察しないと死亡診断書が書けない（死体検案書になる）という法律にもとづくものです。注射や点滴など医療処置を望まれる場合は、入院していただくことになっています。

◎病院の役割

病院の主な使命はいうまでもなく入院治療です。現在金山病院の入院患者のほとんどは70歳以上であり、当地域においてこれからの10年間65歳以上の人口の著明な減少はなく、この年代の入院治療を要する人は増えこそすれ減少することはないと考えられます。そのような中で死因の三分の一以上を占めるがんの入院治療のためにも病院が果たす役割はますます大きくなっていくと考えられます。がんの治療を含め終末期の入院治療は居住地から近いこと、療養環境の良いことが求められます。現在当地域においてはこれらを満足させる施設はありません。皆さんが利用できるためにも一刻も早い病院建設が望まれます。

下呂市立金山病院 院長 古田智彦